

細心の注意を払いながら、産業機械を組み立てる

井さんは、長く産業機械の組み立てに携わり、その確かな腕は「現代の名工」として評価を受けるほどのものです。お話からは「自分の仕事」に対する情熱と誇りが感じられます。

産業用機械組立工 井 武敏さん



いいえ、と！●昭和23年大分県生まれ。農業高校卒業後、実家で農業に従事。その後、神奈川県川崎市で土木関連分野のダンプカー運転手を経て、化学プラント工事の仕事を経験。後に山九重機工株式会社に入社し、現在、同社工事部工事主任。高度熟練技能者、一級仕上技能士。平成27年度の卓越した技能者（現代の名工）に選ばれる。

さまざまな現場に向き
産業機械を組み立てる

——現在のお仕事に就かれるまでの経緯を教えてください。

井 私 は農業高校を卒業し、実家で農業に従事しながら、町役場でも臨時職員として働いていました。そんな中、あるとき近しい人からのアドバイスもあって、若いうちに都会での生活を経験したいと考えるようになり、神奈川県川崎市に出てきたのです。

当初は土建関係の仕事でダンプカーの運転手をしていました。しばらくして化学プラントの工事に携わる人を知り合い、この仕事に就きました。私が22歳のときでしたね。

——それまで経験がない仕事ですよね。戸惑いはありませんでしたか？

井 私は農業高校の出身ですが、機械いじりが大好きでした。この仕事に就いたのも、そうした機械いじり好きが高じた結果かもしれません。好きでなければ、いい仕事はできないのではないかと思いますね。

ただこの仕事は石油精製工場の蒸留塔など、高い所に登らなければならぬ場合があります。仕事に慣れるまでしばらくの間はともこわかったですね。蒸留塔は40〜60メートルくらいの高さがありますから……。

——お仕事はどのようにして覚えたのですか。

井 先輩たちがどんなふうに仕事をすればよいのかを丁寧に教えてくれたので助かりました。よい先輩たちに恵まれ、感謝しています。また早く一人前になりたいと自分でも努力しました。

——産業機械の組み立てといっても、一般の人たちにはなかなかイメージできません。お仕事の内容を教えてください。

井 私たちの主な仕事場は実際に機械が稼働するさまざまな現場です。その現場で設計図通りに種々の部品を組み合わせて、産業機械を組み立てるのです。例えば浄水場や下水場で使われる脱水機関係のプラントを組み立てる場合

もあるし、発電所で使われる機器の入れ替え工事を行うこともあります。また組み立てるだけではなく、個々の部品をどのようにして現場に搬入することも考えなければなりません。種類によって大きさはさまざまですが、中にはレーラーを敷いて運び込むような巨大なものもあります。

私たちは産業機械を現場に備え付けるための段取りや搬入、実際の組み立て、後片付けまで一連の作業をすべて担うわけです。

15〜16人くらいが一つのチームとなつて仕事をすることが多いですね。平均すると一つの現場で2カ月間くらいはかかります。一つの仕事が終わると、別な現場に移ります。私も全国各地の現場に出かけて、仕事をしています。

——一口に産業機械といってもその種類はさまざまで、組み立ての方法も同じではありませんよね。

井 その通りです。機械の種類も現場の状況もそれぞれ違うので、パターン化はできません。だから基本的なことを踏まえつつも臨機応変な対応が必要です。

確かな精度が求められる
ごまかしがきかない仕事

——お仕事では100分の何ミリとい



▲熱交換器のチューブバンドル入替工事。チューブバンドルとは熱交換を行う細い管を束ねたもの。井さんは「自分たちが組み立てた機械が問題なく稼働したときが最高の喜び」と語る。



▲発電所での熱交換器（重量80トン）の入れ替え工事。井さんたちはチームとして細心の注意を払いつつ、作業をする。

う単位で測ることが出来るダイヤルゲージを使うそうですね。大型の機械を組み立てるときにもそれほどの精度が必要なのですか。

井 一般の方々は大型の機械の設置にはそれほど精度は必要ないのでとは思っていらっしゃるかもしれませんが、そんなことはありません。大型の機械でもダイヤルゲージを使って確かな精度で機械を組み立てなければなりません。

そうしないと機械を稼働したときに振動が発生して、いろいろな支障が出てきてしまいます。この仕事では絶対にごまかしがききません。

——お仕事のやりがいや喜び、あるいは厳しさを感じるのはどんなときですか。

井 一番喜びを感じるのは何と云っても組み立てた機械が何の問題もなく稼働したときですね。そのときはそれまでの苦労が報われたという思いがこみあげてきます。かつてと比べると格段に道具がよくなったので、作業もずいぶんやりやすくなりました。昔はコロと呼ばれる丸太を敷いて大きな機械を移動していました。

これまで仕事自体にそれほど厳しさを感じたことはありません。ただ暑さと寒さはこたえることがありますね。暑いときに熱を使わなければならぬ。寒いときに寒さを感じなければならぬ。寒いときに手袋をせずに素手で部品を扱わなくてはなら

ないときもある。手袋についているホコリなどが精度を必要とする部品に付着してしまうと問題が起きてしまいうすからね。

得意分野を一つでも見つければ可能性が広がる

——若手の人材育成にも熱心に取り組んでいらっしゃるそうですね。どんなふうに指導していらっしゃるのですか。

井 一つは現場で実際に仕事をしながらの教育です。あることを一度教えたらできるだけ自分でやってもらおうようにしています。私はその様子を観察しながら、もし問題点があったら、修正するように注意します。

若手が一人前に成長するには自分を取り組むということが大切なんです。自分なりに努力したり、うまく仕事ができるときにはほめるように心がけていますね。人はほめられてこそ成長すると考えているからです。

また常々、機械に傷をつけないように十分注意してほしいと言っています。それが小さな傷であってもお客様への印象はよくありません。自分もお客様も満足してはじめて「いい仕事ができた」と言えるのですから……。

そのほかにも当社で設けている職業訓練校で講師として若手を教えることもあります。

私は自分のもっている技術や技能はすべて若手に伝えたいと思っています。だって同じ仕事をするなら、みんな協力し合って仕事をしたほうがずっと楽しいじゃないですか。独りよがりにならずに仕事をしたほうが、スムーズに運びます。

——このごろはいったん仕事に就いても、短期間で辞めてしまう若者が少なくありません。その原因の一つに、仕事とどのように向き合うかわからないということがあるようです。このような若者へのアドバイスをお願いします。

井 そうした若者は自分の可能性を見つけられず、仕事も思うようにいかなくなつて、うんざりしてしまうということがあるのではないのでしょうか。そうならないためには、何でもいから自分が得意とすることを一つでも見つけると効果的だと思いますね。その一つの得意なことが軸になって可能性が広がり、やがて仕事の楽しさも感じるようになるのではないかと思います。

また最近の若者は同じ世代だけが集まる傾向があるようで、残念に思います。たまには自分のおじいさんくらいの世代と付き合ってみたら、それまでとは違う世界を知り、新しい知識にも接することが出来るのではないのでしょうか。それが仕事にも反映するのではないかと思うのです。